



秋本番です。

銀杏ぎんなんと読めば、黄色の丸い実や、茶わん蒸しを彩るエメラルド色の実を、銀杏いちょうと読むと、扇形の葉や真つ黄色に染まる里山の樹木が浮かんできます。

「寒露かんろ」は、1年を24つの季節に分けた二十四節気にじゅうしせつきのひとつで、毎年10月8日頃から22日頃までになります。

朝夕は、草木に降りる露も冷たく、夏とは明らかに違う空気を感じます。秋の長雨が終わり本格的な秋が始まり、五穀の収穫もたけなわで、農家は忙しくなります。

いつしか時は「霜降そうこう」へと流れ、読んで字のごとく北国では初霜が観測されます。かつて生活していた出水平野には、はるかシベリアから鶴の使者が訪れます。

鶴が飛来するこの頃、万葉集の次の一首を思い出します。「旅人の 宿りせむ野に 霜

降らば 我が子羽ぐくめ 天あめの鶴群たづなむら」旅人が宿る野に霜が降るのなら、鶴たちよ、その羽でわが子を包んでくれまいか。と、母親の子どもへの思慕しほの情を深く感じさせてくれる句です。

一方、「いじめ」が絡んだ生徒たちの悲惨な事故が報道されています。15歳、16歳という人生のとは口で、自ら命を絶つ現実があります。痛ましい限りですが、いじめの背景には、家庭を含め、今日の社会が抱える根の深いものがあるように思われます。

親に愛されていると思えない子は自分に自信がなく、他人をうらやむ嫉妬しとだけが凝り固まっています。大人は、いじめられる子の声や叫びに耳を澄ませ、いじめが取り返しつかない惨禍をもたらし、子どもたちに繰り返すことを、子どもたちに繰り返す教えなくてはなりません。人はひとりでは生きられない

いから集団をつくります。集団の中では、仲間意識が強くなる中で指示する者と従う者ができ、そこから排除すべき対象をさがす傾向があります。つまり仲間はずれです

これは、子どもの世界だけでなく、古来、大人の社会でも繰り返されてきたことです。いじめにも、残念ながらこうした社会的構造が潜んでいることは否めません。

「おはようと あいさつかわす ゆめをみた これが本当に なればいいのに」。ある子どもの願いです。「おはよう」。大切にしたいと思います。



指宿市長
とよどめ えつお
豊留 悦男